
大陸ものがたり

さかさかまさかい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大陸ものがたり

【Nコード】

N4187D

【作者名】

さかさかまさかい

【あらすじ】

コアの軍師として招かれたニックだったが？

第一話 コアの軍師

ここはエル大陸。

エル大陸は6の国からなりたっている。

それぞれが軍を持ち、自分の領土を広げんとばかりに互いに侵略戦争を繰り返していた。

その国の一つ

「コア」は自分達の領土を広げるため、軍を指導する

「軍師」を招いた。

彼の名はニック。これから皆様にはニック視点でこの物語を読んで頂けたら幸いです。

1話

コアの軍師

「ここが・・・コア・・・」俺は初めてコアの地に足を踏み入れて愕然とした。

否、予想道理でもある。

国王の逃走、住民の亡命、山賊の横暴に魔物の出現。こんなことが起きているのだから、今更俺なんかよんだって手遅れだろうが・・・

俺は近くにあつた丸太に腰を下ろし、頭をかいた。

「俺にどうしろっていうんだ」

そんなことを一人で考えていたら、いきなり目前で何かが白く光った。

その光は俺めがけて飛んできた。これはこの技は知っている。理魔法のサンダーだ。

理魔法とは術者が自然の力を借りて攻撃する魔法攻撃のことだ。

俺は持っていた大刀でサンダーを弾き返した。

すると、

「ヒィ」と小さな悲鳴がかすかに聞こえた。誰の悲鳴かって？そんなのばかでも分かる。さつきサンダーを放ったヤツに決まってるじやねーか！

と、一人言を言いつつ、俺は一瞬でサンダーを放ったヤツにきりかかった。大々的こういうことをするのは現金目当ての山賊に決まってる・・・！？

俺は振り下ろそうとした刀を止めた。俺の目のまえで手で頭を抱えてしゃがみこんでふるえていたのは、まだ子供だったからだ。

「おい」と声をかけると微かに返事が聞こえた。良かったまだ話せそうだ。俺は言葉を選びながら彼に質問した。

「君、名前は？」

「ジル・・・」

「こんなところでなにしてるの？」つぎの瞬間おもいもよらない答えが帰ってきた。

「強奪」

バカな！？こんながきが強奪だと！？否、落ち着け・・・聞き違いそうだ！聞ききとれなかったんだ！

「小僧、もういつかい聞くぞ、こんなところでなにしてたんだ？」

その時子供が見下し型喋りで口を開いた。

「あんたさあ、子供がひとを殺さないとも思ってた？」

俺は何もいいかえせなかった。子供は俺を見てあざけわらった。

「殺すよ。子供だつて人殺すよ。このバツチ知つてゐる？？」

と子供は彼の胸についてゐるバツチを指差した。俺はそれに見覚えがあつた。それは・・・

「ヘッドキラー」

聞いたことがある。ヘッドキラーとは

「賞金稼ぎ」のことだ。

第一話 コアの軍師（後書き）

はじめまして、さかさまさかいデス！今回初投稿させてもらいました。最後まで読んで頂いた皆様には感謝の気持ちでいっぱいです！これからも続けていくので続けて読んで頂けたら幸いです。ヨロシクお願いします！

第2話 策略

第2話

ヘッドキラー

「よくわかってるじゃないか。じゃあ、なんで俺がアンタを狙ってたとおもう？」

少年が問いた。

「そんなの分かるわけないじゃ・・・」と途中で俺は言葉を止めた。まで、よくかんがえろ・・・俺は軍師だ。目のまえにいるコイツはヘッドキラーだ。このヘッドキラーを狙ってるのは俺だ。じゃあ俺は・・・

！？まさか！？俺は賞金首になってるのか！？まさかコアの軍師になったんじゃないかって、賞金首になったのか？！つまり俺ははめられた！！

3日前、コアの使者という男が俺の元にきた。

もちろん、コアの軍師になることを頼むためだ。

仕事のなかった俺は疑いもせずそのはなしにサインしてしまった。

でもあれはきつと俺を賞金首に登録させるためのサインだったんだ。何故そんなことをするかって？いまはこの国でも戦争だ。能力の高いおれたち軍師がどっかの国と手を結ぶとやっかいなことになる。だから、その前つぶしてしまおうと考える国がこんなことをしたんだ。

その時腹に激痛が走った。なんだ・・・よくみると刺されてんじやねえか俺。腹には小型の果物ナイフが刺さっていた。さっきまでいた少年は姿を消していた。いや、本当はどこかにかくれていたのかもしれない。でも、俺の意識はほとんど遠く・・・

気がつくと俺はベットのの上に寝ていた。あれ、此処はどこだ？確か俺は賞金首にかけられて、！！腹の傷が治ってる！！いや、傷跡がない！刺されたんじゃないかったのか俺は？その時、殺風景な部屋のドアが開いた。でてきたのは、3日前俺を賞金首にかけた男だった。

第三話 コア軍最強の女。

「気分はどうですか？」と男が近づいていてきた。

「おい、どういいうつもりだ」

俺の中の怒りの虫が鳴き出した。

「さあ？何のことかわかりませんな。」

男は全く悪びれる様子もなく続けた。

「貴方にはコアの軍師を頼んだだけですが、何かありましたか？」
この男わざとこんなこといつてるのか？

そうおもうと怒りの虫が爆発して気が付いたら掴みかかっていた。

「ふざけるな！お前が仕掛けたんだろ！ お前が俺を賞金首に登録させたんだろ！」

いきなり掴みかかれた男は何のことかわからないというかおで困惑していた。

「ちよつと待つてくださいよ！賞金首？何のことか全くわからない・
・」しかし、男の弁解は俺の怒りの虫に火を注いだ。

俺は怒りまかせに男の体を揺さぶった。しかし、つぎの瞬間誰かに首根っこをつかまれ、俺は掴んでいた男の胸を離れた振り返ると、黒いふーどに身を包んだ少女が立っていた。でかい・・180は軽く越えている

男は俺が掴んでいた胸元をけわがらしそうに払っていた

「来たか、

「来たか、ファイアット」

ファイアットという名前らしい。

「大丈夫ですか、ファイルさん、こいつどうします？」

俺の首根っこを持つ手の握力が一段と強まった。

「放してやれ。」という男の命令で俺は苦しみから解放された。激

しく咳き込む俺をよそに男は話しをつづけた。

「あー、ニツク。どういつかぜのふきまわしかしらないが、私はあなたに軍師就任を頼んだだけだ。信じてくれ」

「彼女はフィアット。コア軍隊の中で一番能力の高い者だ。」

「・・・そうなのか？この男は賞金首の事は全く知らないのか？

「なああんた、ジルっていう子供知らないか？」

「ジル？誰だそれは？」 本当に知らないみたいだな。

「悪かったな、掴みかかったりして・・・」

「いいさ、これから軍師として働いてくれるなら。」

「フィアット、これからニツクを軍に案内してくれ。」

フィアットは了解したと男に頭を下げたあと、俺に言った。

「ついてきな、これからコアの軍部に向かうぞ。」

こうして、俺の軍師としての物語が始まった。

第四話 コアの事情

「まずは、うちのメンバーにあってもらわなきゃな。」

軍部に着くまえにフィアットがいきなり、話し始めた。

「おまえは、今日からこのリーダーになるのだから、そのくらい当然だろ？」

「ああ、わかってる、ところでそのメンバーは何人くらいいるんだ？」

メンバーの数は戦略を立てるときには必ず把握してなければいけない。

「.....」

フィアットは痛いところを付かれたという感じで黙ってしまった。

「なんだ、どうかしたか？」と少し動揺して、俺は聞き返す。

「五人だ。」

「は？」

「「は？」じゃない。メンバーの数は私も入れて五人だといったんだ。しかも、そのうちの三人はまだ実力のない、新米だ。」

とフィアットが嘆いた。「ちょっと待て！！五人しかいないって、どういう事だよ！そんな数じゃ他国からコアを守るのだって、」

「言っな」

フィアットが静かに言った。彼女の綺麗な青い目は、何かわからないが独特な威圧感がある。

「そのくらい、わかってるんだよ。だからこそお前の力が必要なんだ。いま、お前に見捨てられたらコアはなくなってしまうんだ。頼む協力してくれ！」フィアットは頭を下げて懇願した。

人の首、掴んでおきながらこの態度かとは思ったが、俺は彼女の必死の願いに思い留まった。でも、さすがに五人で闘うのはキツイ。

「人数はどうにかならないのか？流石に五人はきついぜ。」

「いま、ファイル様が尽力で各地から有能な戦士たちを探してくだ

さっている。それまでの辛抱だ。」

そのことばを聞いた俺は少し安心した。

そのあと俺達は無言で歩いた。彼女のこともしろくろと聞きかかったが、機会が伺えなかった。

「ほら、着いたぞ。此処が私達の軍部だ」

目の前には小洒落れた、レストランがたっていた。

第五話 コア軍隊

俺は中に入ってみて、おどろいた。洒落た店の中には、何もなかった。あるのは、テーブルがひとつくらいだった。

そのテーブルを囲んでいる数人の人間が確認できた。おそらく、フィアットが言っていたコアの残りの軍人だろう。彼らはテーブルを囲んで宴じていたが、おれたちに気付いたらしく、一人の青年が手招きした。どうやら、俺の席もあるらしい。席につくと、向かいに座っている少女が身を乗りだして、質問してきた。

「貴方誰？フィアットの彼女？！」

彼女？男だぞ・・・俺は。誰一人として、少女の質問には反応しなかったため、妙な沈黙が続く。

突破口となったのが、フィアットの一言だった。

「あー、コリンズ？ちゃんと皆に説明したのか？」

コリンズと呼ばれた青年は俺は悪くないというように反論した。

「したさー！でもアルザの奴、一人で別世界に行って俺の話聞かねーんだもん」アルザと呼ばれたのはさつきとんでもない質問をふっかけた、白銀の少女だろう。

「まあまあ、二人ともこんなときに喧嘩はやめなよ。うん、コリンズの説明はよくわかったよ。だからさあ」と切り出したのはさきほど俺に手招きした男性だ。

だが、ここでアルザがヒステリックに叫んだ。

「何よニルバーナ！それじゃあ私が悪いみたいじゃない。

「そんなこと言っていないさ、アルザただ折角、リーダーが来たんだからもめるのはよそうよ。

と静かにアルザをなだめるニルバーナ、しかも、この男、顔が仮面でおおわれてるため、おこってるのか、笑っているのかよくわからない。

そんな中で一人だけ、黙っている男性がいた。皆、基本的に顔は白

色だが、彼だけ黒人なのでよくめだつ。「やめろ」

彼が一言いうとあたりはさっきまでの口論が嘘の様に静まった。フ
イアットが俺に耳打ちした。

「彼がバース。この道二十年の歴戦の勇者だ」

バース？何処かで聞いたような・・・

バースは俺の方に手をさしのべてきた。

「俺はバース、この隊長をやっているものだ。で、あの仮面がニ
ルバーナ、で銀髪がアルザ、眼鏡がコリンズだ、みんな個性的だか
らすぐおぼえるだろ？」

とバースが笑った。

第6話 最初の敵

「ところで、これからどうするつもりだ？」俺はバースに聞いた。
「取り敢えず、会ってもらいたいやつがいるんだ。そいつの所にま
ずはいこう。」おれたちは洒落たレストランを出て、2kmほど
離れたところに住んでいるという、コア軍宰相のところに向かった。
もちろん徒歩で向かうわけだが、向かっている間コリンズとアルザ
はずっといい争っていた。バースによると、何やら宰相が話したい
ことがあるそうで、そのために宰相のいるコア軍指令部に行くらし
い。

「ああ、あと宰相の前ではファイルの時みたいに掴みかかるなよ」
とバースが忠告した。

「何だ？怖い方なのか？」フィアットがバースに替わって答えた。

「ああ、あの方はどんなに小さい失敗も許されない。掴みかかった
ら、腕が飛ぶぞ」

どうやら、コアの兵士が少ないのはここにも原因があるみたいだ。
そんなことを話しているうちにあっという間に宰相のいる、軍指令
部の近くまできた。

「漸くついたな。さすがに徒歩2時間はキツイな。」とコリンズ。

「あら、コリンズ。貴方基礎体力がないのよ。だからあんな斧捌き
になるのよ。」

とアルザ、ここでまた喧嘩が始まった。俺達は彼らを無視して、す
すんでいたが、先頭をいくバースが

「静かに。」と言うとあっというまに静まった。

「どうしたんだい、バース??」とニルバーナが聞く。

「何かきこえないか??」

確かによく耳を澄ますと音否、声らしきものがきこえたが、低くボ
ソボソとしているので何をいつているか全く聞き取れない。

「敵か?」

「嫌、この時点でおれたちを狙うグループはないはずだ」

「じゃあなんなんだ？この・・・」

といいかけた、ところで俺は思わず鼻をつまんだ。低いこえがちがづくにつれて、強烈な腐敗臭が鼻を襲う。

「やだあ！この臭いってもしかして・・・」アルザが鼻を覆いながら叫んだ。俺もこの臭いは知っている。

「生きる屍」つまり、ゾンビの臭いだ。

何故こんなところにゾンビがいるのかは知らないが、臭いがピークを迎えたとき、二体のゾンビが姿を現した。

第七話 被害（前書き）

ごめんなさい、タイトルをまちがえてしまいました。「対決」とな
ってますが「大陸物語」の七話です。ご迷惑をおかけしてしまいま
せんでした。これからも掲載して行くので気が向いたらアクセスして
ください！¥（○）／

第七話 被害

ゾンビ・・・肌は青く、やけただれ、黄色い目をギラギラ光らせている。ゾンビの吐く、特殊な液にふれると腐敗してしまうといわれている。

「皆、下がってろ！ここは俺とフィアットで戦うから、奴の攻撃範囲外に移動するんだ！」バースがゾンビの初撃を受け止めながら叫ぶ。

俺は、コリンズ、ニルバーナ、アルザと共に近くの木陰に隠れた。

「でも、何でゾンビがこんなところに現れたんだ・・・？」

コリンズが独り言のように呟いた。

確かに俺も同感だった。ここは、一般人も通る一般街道。管理はきちんとしてある筈なのに・・・！？俺は待て！と叫ぼうとしたが遅かった。

「悪魔腕」

フィアットの放った闇魔法がゾンビの体を両断した。両断されたゾンビは断末魔の悲鳴とともにどくどくしい液を辺りに牧き散らしながらも、光の粒子になり消えた。

「フィアット！？大丈夫か？！」俺はなりふりかまわず蹲っている彼女のもとに駆け寄った。どうやら、ゾンビの液を触れてしまったらしい。「何処だ、何処に命中した？」彼女は顔の右半分を隠していた。

「まさか、顔にあたったのか？？」俺は彼女の手をどかした。

「や、やめる見るな！」彼女は弱弱しく言ったが、俺は力づくで彼女の手を顔から外した。

心配して駆け寄ったアルザが

「きゃー！！」と叫んだ。フィアットの顔半分は火傷の様に焼けただれていた。

「バース、バース！来てくれ！」パニックに落ちたコリンズがバ―

スを呼ぶ。この大事でもバースは冷静だった。

第八話 激走

バーズは残っていたゾンビを片付けると、フィアットのもとに駆け寄った。「ゾンビの液に直接ふれたのか！？おいフィアットこれ何本だ？」

バーズはフィアットの前に指を差し出した。

「二本？・・・三本？駄目だ判らない・・・」「やっぱり、視力が極端に低下してるな・・・」「どうするんだ？このままだとあぶないぞ？」俺が落ち着きなく聞く。

「まあ、落ち着け。ニック、フィアットを運べるか？コリンズたちは、上に報告してこい。」

「わわわわ、わかった。」完全にパニックに陥っているコリンズを、はさんでアルザたちは姿を消した。俺はフィアットより背が低いため、おぶるというよりも半ば引きずるようにして、走り出した。

走り出して、十分ほどたっただろうか、息もかなり上がってきた。

「ごめんな、ニック・・・」フィアットが消え入りそうな声で呟いた。その時、行く手に大きな館がみえた。

「彼処だ！彼処が宰相の館だ！」「頑張れ！彼処まで走るんだ！」前をいくバーズが叫んだ。

俺は残された力を全て使って館まで走り切った。館の前ではコリンズたち三人がおちつかない様子でまちかまえていた。

ハアハア！館の前で俺は倒れこんでしまった。無理もない、ここまでフィアットを担いで猛脱走してきたのだから。

「よく頑張ったな、ニック！」とバーズが背中を叩いてくれた。「早めに息を整えてくれよ。今すぐにも館内に入りたいくらいなんだ」そうか・・・フィアットが・・・

俺達は数分後に館内に入り、フィアットはすぐに軍医のもとに運ばれた。残された俺達4人はこれまで起きたことを伝えるため、宰相の部屋に向かった・・・

第九話 宰相

俺たちは宰相の部屋の前にいた。

バースが部屋のドアの前に一歩出て、ノックした。

「コア軍隊、参りました。」バースが唱えた。するとドアの向こうから

「入れ」という厳格な声が聞こえた。俺達はバースを先頭にして中に入った。部屋の中は殺風景で書斎が2、3台と大きな机があるだけだった。その真中に男性が一人座っていた。大柄でだれも寄せ付けない近寄りがたい威圧感を放っている彼が恐らく

「宰相」だろう。

宰相は深くため息をつくときバースを見つめた。

そして、厳格な声で話し始めた。

「バース・・・今回の事どう感じている?？」

「はい、これは自分のミスです。」

「それだけか?」

「い、いえ、フィアットを失った事は我が軍隊にとっても大変な損失で・・・」そうだ、大損害だな。で、これからどうするつもりだ? 3日後にはカリブに行ってもらうぞ。」

「え?! カリブにですか?」

「ああ、今カリブは主力部隊が遠征に出て、カリブを守っているのは小さな傭兵団だけだと聞いている。そこなら、お前達だけでも問題ないだろう?」

「はあ・・・ですが自分達はたったの四人、もし、これ以上戦力をおとすようなことが有りますと・・・」

「バース、私の命令に逆らう気か?」宰相は俺達を物凄い目で睨んだ。そこにいた、全員が蛇に睨まれた蛙のような気分になった。反論がないと分かれると宰相は満足気な顔でコリンズ達に言った。

「君達はまだ新米だが、実力は私が保証する。危ないと思ったら帰

つてきなさい。」

その言葉を聞いたバースを除く俺達は安堵に包まれた。

「宰相！私頑張ります！コアの為に！」アルザが言った。

「そうか期待してるよ、アルザ。」宰相は笑顔でアルザの問いかけに答えた。

何だ、人・・・怖い人だと思ったけどいい人そうじゃないかと俺は思った。

「ああ、ニツク。君には後で話がある。またきてくれるか？」帰りに宰相が言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4187d/>

大陸ものがたり

2010年10月10日15時10分発行